

年収300万でも「未来の家計簿」で黒字生活!!

自分の将来については、誰もが「未読帳」。将来どれだけお金が必要かが分からないから不安もいっぱい。しかし、先々の支出をある程度把握できれば年収にかかわらず黒字生活が可能だ。収入と支出のバランスを今一度見直す時期が来た。

住宅ローン支払いは収入の20%が理想的

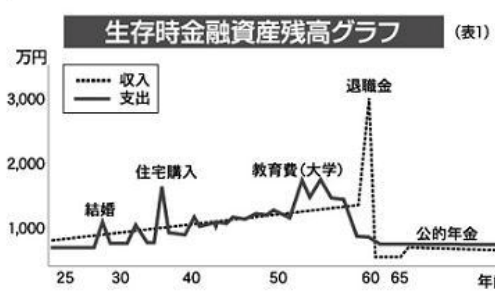
ファイナンシャルプランナーによると、家計簿に大きく関わっている重要な要素が住宅ローンだ。住宅購入時に、銀行は月額の支払いが収入の25〜30%の幅でも貸してくれるが、実は収入の20%に抑えるのが理想的(表2参照)。この根拠は子供が高等教育に進む際に激激に負担のしかかる教育費が背景になって

いる。ローン支払いを続けながらも表1のように教育費が収入を上回る時期にきちんと対応できる貯金ができていくかが重要だ。

子供が大学生の時期に家計が赤字になる場合がほとんど

ではその教育費だが、現実にとどのくらいかかるのだろうか。子供一人当たりの総額は、幼稚園から大学まで公立の場合約1000万円、私立なら約2000万円かかるという。総額を聞くとも現実逃避しなくなるが、受験を控えた高校3年から大学生の時期が一番負担が大きい。先のこと考えずに家計をやりくりしている、この時期に貯蓄が底をつき、赤字転落する家庭が多いという。あるFPは「年収が300万円でも800万円でも例外はない。ポイント」

給料を上回る大学生の教育費。貯金の備えは大丈夫?



理想の収入構成比率

項目	構成比
基本生活費	30%
住宅費	20%
教育費	8%
保険代	5%
レジャー等	8%
貯蓄	13%
税金社会保険料他	16%
合計	100%

(表2)

「ベスト」。保険会社が勧める保険の転換。下取りは95%が保険会社と担当者のため、保険加入者にとって必要な保障をカバーしてくれる保険が原則だ。そして、宮崎さんは「毎月の電気料金や携帯電話料金などは何のために支払っているか理解しているが、生命保険はあまり深く内容を理解されていない方が多い」と話す。生命保険の見直しのポイントとして「保障内容を確認する」「掛金は上がったか」「払い込みの金額が適切か」「加入の年齢が適切か」「加入の期間が適切か」を確認する。そして、宮崎さんは「確定に必要な資金は元本保証型で準備しているか」「払い込んだ金額に対して貯蓄性のある商品か」「大黒柱に方があった場合でも準備できるかの3つをチェックする」と勧める。そして、宮崎さんは「特定の保険会社に属していない」「ファイナンシャルプランナーの立場から」「子どもに必要教育を受けさせてあげたいのが、親としていくらまで負担するのか、学資保険と貯蓄をうまく組み合わせるなど金融商品のメリット・デメリットを把握することが必要」と強調。短期的な収支だけでなく、長期的な家計簿を設計することが大切だ。FPを利用するのが一番。その場合、無料の相談会を利用すると得た。



ファイナンシャルプランナー DC(企業年金総合)プランナー 宮崎 貴裕さん

年金不安、少子高齢化に加え、長引く景気の低迷で勤労者世帯の家計は厳しい状況に置かれている。そんな中、毎月の家計にタイムリットに影響を与えているのが生命保険と子ども将来に供える教育資金だ。不況に負けない賢い生活設計をいかに築けるかが「スマイルマネー」「ライフ・セキナー」を開催しているFP「コンサルオンス大阪のファイナンシャルプランナー」宮崎貴裕さんにアドバイスを求めた。

「誰のための保険?」「何のための保険か?」

不況に負けない生活設計には、人生の3大資金「住宅資金」「教育資金」「老後資金」をバランスよく考えることが欠かせない。中でも宮崎さんは「毎月の家計にタイムリットに影響を与える生命保険と子どもの将来を見据えた教育資金の準備」を強調する。カタチのない金融商品である生命保険については「30代と60代の目的は異なる。誰のための保険か?何のための保険か?をあらためて見直す」とアドバイスする。

「生命保険」「教育資金」専門家のアドバイスでライフプランを構築

生命保険業界は数年前までは定期保険特約付終身保険が代表的な商品として販売されていたが、現在では「アカウンタブル」「終身移行型」などが主流になっている。そして保険の基本はあくまで「シンプル」な

大阪日日新聞
5月16日号
5月23日号
掲載

大丈夫ですか？ あなたの保険！

家計の節約を考えると、まず候補に上がるのが生命保険など、保険の掛け金を見直しをしている人が増えています。そこで、ファイナンシャルプランナーの宮崎貴裕さんにお聞きしました。

宮崎 貴裕さん

ファイナンシャル
プランナー



今の保険。
どこが問題？



ほとんどの方が「定期保険特約付終身保険」「アカウント型」「終身移行型」などの保険商品に加入されておられると思います。掛け金は年々上がっていくことはないのがメリットですが、主流になっているのが10年更新型です。

例えば30歳で子どもが生まれたのを機に加入した場合、更新時がくると子どもは教育費のかかる10歳に成長し、本人は40歳になります。ここで更新すれば掛け金がグッと上がり、さらに家計を圧迫することになります。

この掛け金上昇をできるだけ抑える方法として、更新が近づくと新しい商品への見直しとして「転換」をすすめるケースが多いですが、自分や家族にとって必要な保障をカバーするためのものが確認する必要があります。

トクする見直しの
ポイントとは？

皆さんが保険に加入する際、注目される部分は「掛け金」と「保障額」では？ 詳しい仕組みまで説明を受け、加入したというケースは意外と少ないのではないのでしょうか？

そこで、保険の見直しをされるに当たり必要になってくるのは、これから加入する保険は「何のため？」「誰のため？」を改めて考えることです。保険の目的を考え、必要のない保障内容、自分や家族には必要以上の保障額が組み込まれていないかを検証し、無駄な部分をそぎ落とし、シンプルな保険にすることがトクする見直しのポイントです。



どこで誰に相談
したらいいの？

電器製品を買う時は販売店に行き、売り場の担当者に相談します。いきなりメーカーに駆け込むことはないですね。

同じように、それぞれに特徴がある各保険会社の商品をそろえた販売代理店を訪ねてください。中立の立場で話しを聞いてくれる専門家に、現在の状況や将来の生活設計を話し、最適な保険を選択して下さい。その際、複数の意見を聞き、納得できる担当者商品を選び、ごをお勧めします。